自宅にくる女たち　エロエロ異次元世界へのパスポート　部屋でひたすら濃密セックス

※この作品は著者独自の視点、想像から作ったフィクションであり、

登場人物や内容などは架空のものも多く含まれています。

これは風俗ではない。

風俗とは全く異なる。

だけど自宅に、女たちがやってくる。

人生とは一つずつの積み上げ。

回数を増すごとに女と心地よくなっていく・・・・・。
女とするその肉体交渉の“精度”を良くしていくのである・・・・・。

俺は坂を上り崖へ向かった。
そして草むらに隠れた小さな肌色のスイッチを押した。

そのスイッチは女の子が家にやってくるスイッチだった。

スパンとしては三か月に一度。

男の性欲バイオリズムからすれば少なめなのだが、そういうシステムであった。

これを知ったのはとある駄菓子屋の軒に置かれていた一枚の汚れた紙。
始めは解読不能の暗号のように見えたが、目をこすってよくよく見てみるとちゃんと読解可能な日本語であった。

サガキ﨑の崖（がけ）へ行け。左斜め４７度の草むらを探せ。
そこに女がある。

夢を見ているようであった。

いつの間にか俺は、狐（きつね）か狸（たぬき）かにつままれ夢の世界へ入っていってしまったのか。

気がつけば、本当に３ヶ月に一度自宅にしっかりと正装を携えた女たちがバッグを持ってミニスカートを穿いて時にはぴっちぴちに足に密着したジーンズを穿いてやってくるではないか。

だけど最初のうち、肉体交渉は拙く下手っぴなものであった。

女はそんな俺を笑ってくれていたのか？？

そうは思わない。

女も自分も一致しているのである。

微量の違いもなく完全に。

「んくちゅっ・・・・んぶぶちゅっ・・・ぺろれろ・・・」

美味しそうに貪る肉棒。俺のいわば精神が彼女に憑依して統一され一つになる。

言わばペニスを舐めすすっているのは俺自身なのである。

全てを溶け合うことを意味している。

セックスはやっぱり女の子がそこにいないと成立しない。一人では限界が知れている・・・？そうではない、何も出来っこないのである。

初めての女の子の具体的な思い出話に移ろう。

玄関のインターフォンが鳴る。

郵便配達でも来たのかな・・・・と何の気なしにドアを開け

ると、そこには満面の笑顔があった。

「こんにちはっ！！！」

彼女は右手に茶色のブランドバッグ。そして左手をそっと胸元に添えた。大きな巨峰の谷間の先っぽが服の襟元に少し見えている。

左耳にはイアリングをしていた。

・・・・・・崖のスイッチを押したことにこれが起因していることを把握するのには時間がかかった。
女の子がちゃんとそれを説明してくれたんだ。

「・・・・・・・なんかまだ信じられないや」

おへそを見ると俺は目を丸くした。

金色のピアスがつけられている。

「・・・・これってどういう意味合いなの？」

純粋な少女がオシャレで友達とやっている風ではない。何故なら彼女はもう３０代後半の色気漂う女性だったからである。

「・・・・・ちょっと背徳感あるから言えないかな・・・・・・」

（体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました）